
秋、夕暮れの向こう側

京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋、夕暮れの向こう側

【Nコード】

N0618C

【作者名】

京

【あらすじ】

少女に見惚れていて、滑り台から落ちた。それが俺の入院した理由だ。しかも入院先には、俺が見惚れてしまった少女がいて、なぜか仲良くなってしまった。……でも俺の見惚れた少女は、重い病気を背負っていた――。

1. 入院（前書き）

この作品は、携帯からの読みやすさを重視して改行を多くしてあります。パソコンからの閲覧が見苦しかった場合にはすみません（汗

1. 入院

「はあー……もう秋だな……」

見えるのはありきたりな公園の景色。赤とんぼがちらほら。俺はそれを、滑り台の上に座りながら眺めている。

「もうすぐこの一年も、終わりだあね……」

独り言。まるで縁側に座ってお茶を啜る老人の台詞だ、と俺は思う。ま、誰も聞いてはいないのだから、独り言くらいは許されるさ。……や、別に独り言が好きじゃないぞ。こんな俺にも感傷に浸りたくなることぐらい、あるんだよ？

それにしても今日の公園の雰囲気は格別である。丁度良い気温。哀愁を感じさせる夕暮れ。なにより、夏の残滓と訪れる秋の気配の、微妙な混ざり具合がとても心地よい。例えるならば——そう、あったかい白米に、溶き卵を混ぜたような感じだ。まさに絶妙である。思わず口元が緩む。

「卵掛けご飯は……絶妙だよなあ」

とん。

弱く肩を突っつかれる。弱く——卵を割ると、駄目なんだよな……。

「あったかご飯に、掛けるだけ……」

とんとん。

肩に軽い衝撃。そうそう、この位の力で、一気に割らないと、破片が混入してしまう。

「ああ、卵掛けご飯！」

「わひゃっ！」

感極まり、軽く叫んだ瞬間、俺の後ろで可愛らしい声がした。反射的に振り向く。

そこには、狭いスペースで見事に尻餅をついた——少女が。

「痛たああ……。もうっ、いきなり叫ぶなんて酷いですよお」

「——っ！」

じっと少女を見つめる。

考える。全部聞かれたか、と。

今日がどれほど独り言日和だかと言って、十七歳の高校生がぶつぶつと、拳叫び出す様はヤバイ。当の本人である俺でも思う。しかもここは滑り台。傍から見ている、俺は相当な変人に映るのではないだろうか？

互いに視線は逸らさない。逸らしたら負ける——そんな訳の分からない確信が、今の俺を動かしていた。

「……あのさ」

「はい？」

勇気を出して、声を絞り出す。

「もしかして、聞いてた？」

にっこりと少女は笑い、そしてきっぱりと言った。

「卵かけご飯って、美味しいです」

——終わった。見事に。

俺はこの先を想像する。ああ、アイツは独り言が好きな奴なんだ、と噂が流れる。俺は必死で否定する。そう、別に俺は独り言が好きになわけじゃないんだ。何となく、何となく独り言を呟きたくなっただけなんだ！

……駄目だ。どう考えても言い訳にしか聞こえない……。

「あのう」

一体どうすればいいんだ——と。

悶々としている俺に、体勢を立て直した少女が話しかけてくる。返答できるほど、俺のダメージは浅くない。首を縦に動かし、その先を促した。少女はしばらくその意味が分からなかったようだが、ふと得心したようにこう言った。

「この滑り台、面白いですよね！」

とびっきりの笑顔で。

「は、はあ？」

「あたし、ここが好きなんですよー。小さい頃よく滑っていて、懐かしくなってまた来ちゃいました」

えへへ、と照れたように、零れるような笑みを浮かべて少女は笑った。

瞬間的に思う——可愛い、と。

小さな上背に、丸みを帯びた身体。腰まである艶やかな黒髪が、彼女の小さな身長をさらに幼く見せている。顔は、寸分の狂いもない彫像の様。大きな黒曜石の瞳。陶磁のように真っ白な肌と、僅かに上気した頬。

もっと他に考える事があるんじゃないかと俺は思った。が、先ほどの独り言が気にならないほど、俺は少女に見入っていた。

「……滑らないんですか？」

俺の顔を覗き込むように見つめてくる。

「あ——いや、お先にどうぞ」

微妙な照れが混じった返答をして、俺は立ち上がった。

一気に視界が広くなる。段々と暗くなり始めた全天が、俺の頭上を包み込んでいるのが窺える。小さな滑り台といえども、高さは中々のものだ。うっかり足を滑らせて転落でもしたら——その先は想像に難くない。

「では、お先に失礼しますっ」

少女はそう言って、滑り台を一気に降る。

風を受け、優雅に舞う少女の黒髪。それに目を奪われたのが俺の間違いだった。

「——って、うおっ！」

ぼう、としていたので、うっかりと身体のバランスを崩してしまった。慌てて手摺りを掴もうとするが——届かない。そのまま身体は宙へと投げ出される。

スローモーションで流れる世界。視界を埋め尽くす夕闇。そういえば、少女の名前を聞いていなかったな——そう思った瞬間、世界が黒く閉ざされた。

2. 病院で（前書き）

引き続き、改行多目です（汗

2. 病院で

2.

薄っすらと目を開ける。

上手く焦点が合わない。ピンボケする画像。それらが落ち着いたとき、最初に視界へと飛び込んできたのは白い壁。次に白いカーテン、白い天井。

……病院か？

俺はゆっくりと身体を起こした。

辺りを見回すと、そこが病院であることに間違いなかった。カード式のテレビなんかがいい証拠だ。あんなもの、病院以外で見たことがない。

でもなんで病院なんかに——そう疑問が沸いたと同時に、滑り台から落ちたことを思い出す。ひどく強く頭を打った気がする。そう認識すると、後頭部が疼いたような気がした。

「ああ——最悪だな」

とにかく、一刻も早くここを出なければ。三日後に試験があるのだ。うかうかしているとダブってしまう。

立ち上がり、壁に掛けてある日めくりカレンダーを見る。滑り台から落ちたのは九月三日だから、せいぜい九月五日頃だろう。

「えーと……お、ビンゴ」

見事に的中していた。今日は五日。

——十月の。

「え？」

もう一度カレンダーを見る。日付は、いい。しかし、どう見ても九であるはずの数字が十になっている。

「……何で？」

悩む。どう考えても、あの転落事故以来、俺は昏睡していたとは思えない。

……もしかして、俺は重体だったのだろうか。

「マジかよ……」

最悪だった。信じられない。俺は一ヶ月もずっと寝ていたのだ。

その間、テストや文化祭、体育祭も終わってしまった。学校行事の大半を棒に振った訳だ。

俺はそのままベッドに倒れこみ、悶々と奇声を出しながら回転していた。その声を聞きつけた看護婦さんがしっかりしてくださいと慌てた声で言ったが、俺は構わず悶々としつづけた。

——ほんとに最悪だ。

Φ

看護婦さんに連れられ、医者の説明を受けさせられた。どうやら俺の頭に異常はないそうだ。しかし、一ヶ月も昏睡していたため、しばらくの間入院しろとのことらしい。自棄になっていた俺にとっ

て、まさにどうでもいい事だった。まあ、秋休みと思えばいいか。そんなことで俺は、入院生活を満喫している訳である。

「はあー……もう秋だな……」

病院の白いベッドに腰掛けながら、ぼそりと呟いた。一ヶ月ぶりに見る景色は、どこか不思議な感じがする。いや、景色だけではない。肌で感じる気温も、人の表情も、かつてのそれとは別物だ。まるで自分が一人だけ取り残されたような感覚に陥ってしまった。

思わず窓から外へと視線を彷徨わせてしまう。

「もうすぐこの一年も、終わりだね……」

呆けながら、そう呟いたときだった。

「あー、洋介さん、前と同じ事言ってますよー」

聞き覚えのある声が、俺の背後から掛けられた。驚き、咄嗟に振り返るとそこには。

「え？」

——公園で見かけた、あの少女がそこにいた。腕を後ろで組み、僅かに微笑みながら。

「ちよっ……な、何であんたがここにいるんだよ？」

俺がそう言っていると少女は、ぷう、と頬を膨らませて、怒った風に言ってきた。

「あ、あんたとは何ですかあんたとはあっ！ 私には、可奈ってい

うちゃんとした名前があります！　これからちゃんと名前でご呼んでくださいね、洋介さん」

いや、初対面に近いのに、そんな無茶を言わないで欲しいのだが。構わず少女は――可奈は、えへへと笑って言葉を紡ぐ。

「えっと、私がここにいる訳は――入院患者だからなのです。あの日はちょっと抜け出しをしまして、そこで洋介さんを見つけたという訳でして」

なるほど、確かに可奈は入院患者用の質素な服を着ている。そこから病状を察することはできないが、多少は重い症状なのだろうと考えたりした。

――って、ちょっと待て！

「……一つ聞いていいか？」

ん？　とでも言いたそうな表情を可奈は浮かべた。

俺は構わず続ける。

「何で俺の名前を知ってるんだよ？」

「ち、超能力でこう、しゅつと読み取りました」

少しつかえながら、しかし即答する可奈。

しゅつ、と読み取れたのか。

なるほど。超能力だったのか。

目の前の超能力者は、実にニコニコと笑っている。

「……あのさ、もしかすると、この病院は精神科だったりするのかな？」

「いいえ？ 別に普通の病院ですけど」

むう、また頭が痛くなってきた。

額に手を当てて、そのまま純白のベッドに身体を沈める。

「洋介さん、あの、冗談ですよ？」

そんな俺を見かねたのだろう、可奈が少し不安そうに言ってきた。そこまで気遣ってくれるのなら、人格を疑いたくなるような冗談は控えて欲しいのだが。

「本当は、ほら、病室の前に表札があるじゃないですか。あれを見ただですよ。えへへ、別に何てことはないんですけど」

当たり前ですよ、と可奈は繰り返した。

なるほど、それもそうかと俺は納得する。確かに病室の前には、『佐藤洋介』と書かれたプレートが張ってある。むしろ、そんな単純な事に気が回らなかった自分が恥ずかしくなる。やはり病院に慣れていないからなのだろう。

——病院なんか慣れたくはないけれど。

俺は身を起こし、中断してしまった話を続ける事にした。

「ああ、なるほど。……で、公園で気を失った俺を自分が入院している病院へ連れ帰った訳か」

話の筋を見失ったのか、可奈は思案するような仕草をした。が、それも一瞬、再び入院に至った経緯を揚々と語り始める。

「そういう事です。でも私一人じゃ流石に連れて行けないので、洋介さんの携帯を使ってタクシーを呼びました！」

——俺の携帯使ったのか。

「初めてあんなものを使いました……。失敗しなかったんですよ、凄いですよね」

はにかんだ笑みを浮かべる可奈。その長い黒髪が、眼前で優雅に揺れる。

や、むしろタクシー会社の電話番号を暗記している方が凄いか、なぜ救急車じゃなくてタクシーなんだとか、色々突っ込みたい所があるがあえて言わない。

「そっか。その時はありがと。で、あんたは——」

睨まれた。俺はごほんと咳払いを一つし、言葉を紡ぐ。

「——可奈は、俺に何か用なのか？」

「え、ええっ！？ あ、あのですね……」

表情が一変、可奈は新雪のように白い頬を朱に染めて、もごもごと口を動かしている。

「——さんが——なら——暇で——一緒に——」

途切れ途切れにしか聞こえない言葉も、小さすぎて聞き取れない。

……ほんと、変な子だな。

俺が訝しげな視線で見つめていることに気づいたのか、可奈はっとした顔になり、そして真剣な顔で見つめてくる。

「洋介さん」

ごほん、とわざとらしく咳払いをしながら、可奈が言う。

「私は今、とおっても暇なんです。このままだと、暇過ぎてぶっ倒れるかもしれません」

はたして暇すぎてぶっ倒れるものなのだろうか。はて、どこかで似たような言葉を聞いた記憶がある。確か、『神を殺すのは退屈である』だったっけか。ならば可奈の言うことは本当かもしれない。もちろん、可奈が神ならば、だけど。

「そこで洋介さん！ 洋介さんは今、暇ですよね？」
期待を込めて俺を見つめる可奈。
ここは頷いていた方が無難かもな。
俺は口を開く。

「いや、生憎寝ているだけで精一杯なもので
ん？ いやいや。

俺は今、ものすごく暇なのだけれども。

可奈ではないが、暇すぎてぶっ倒れそうな勢いである。

なのになんで俺は、茶目っ気満々で可奈に意地悪しているんだろ
うか。

「ええっ！ 暇じゃあないんですか！？」

「寝るだけで忙しいもので」

天邪鬼な解答。意外な答えだったのだろう、可奈はあたふたして
いる。その姿は見ていて飽きない。

そのまま可奈は少し考えたあと、揺れる瞳で俺の顔を覗き込んで
きた。

「ほんとに忙しいんですか？」

「ああ」

「ほんとに？」

「本当だ」

「ほんとにマジですか？」

「嘘だ」

「……むう、なら仕方ないですね——って、嘘だったんですか！」
俺は背を丸め、くくくと笑う。さっきの仕返した。でもまさかここまでベタな返事がくるとはな。もしかすると、可奈にはツツコミの才能があるかもしれない。

可奈は顔を真っ赤にしながら、むーと唸っていた。その姿はまるで猫のようで、妙に可愛らしい。

「ごめん、悪かった。俺も今すごく暇だ」

「うう……信じられませんよう」

よほどさっきのやり取りが応えたのだろう、用心深く可奈は聞いてくる。何か涙目になってないか？ いや、もう引っ掛けはしないからさ。

「マジだって。俺は暇だよ。で、何の用？」

すると可奈は、俺の腰掛けているベッドにちゃんと腰を下ろし、零れるような笑みで顔を覗き込んできた。

そして——軽々とんでもない事を言ったのだった。

「ごはん——ならば、一緒に公園に行きましょう！」

3. 公園

言っておくが、俺は入院患者である。病状が軽かろうが重かろうが、病院を抜け出すことは禁じられているはずだ。

「洋介さん洋介さん、赤とんぼ飛んでますよー」
無論、その抜け出し禁止の規則は、同じく入院患者である可奈も守らなければいけないものだ。それに――俺よりも症状は重いはずだし。

「もうすっかり秋ですねえ……。私、秋が一番好きなんですよ」
にへへと子猫のように笑う可奈。いつの間にか、そのほっそりとした指先には赤とんぼが羽を休めていた。心なしか赤とんぼも嬉しそうに見える。

ああ、秋だな。

可奈の言う通り、すっかり秋だ。

でもさ、俺達は一応入院患者だぜ？

「なあ、可奈」

「はい？ 何ですか洋介さん」

「――病院って抜け出しているものなのか？」

「……洋介さん、とんぼがあっちにもこっちにもいますよ！ もう規則なんて話はしてはいられません！ 一緒にあれを捕まえましょう！」

とてとてと可奈は走り出した。生憎可奈は体力がないので、その速度は歩くのと何ら変わらない。

俺は可奈の背後に忍び寄り、おい、と声を掛ける。

「はひゃっ！」

「……ちよっと待て」

「うう、洋介さんは意地悪です……」

振り向いた可奈の、黒曜石のような双眸には、薄っすらと涙が浮かんでいる。だが俺はお構いなしに可奈を促し、そのままベンチに座らせた。

——言うまでもないが、俺達は今、公園にいる。

あの後、俺達は病院を抜け出した。これが意外なのだが、あっさりと抜け出す事ができた。まず下準備として、病室のベッドに丸めた毛布を横たわらせ、回診の時間帯のチェックをする。その結果、ぎりぎりでバレない時間帯——午後三時から午後五時——があることが分かった。あとは着替えて裏口から出るだけである。

——何ともまあ、すばらしいと言うかなんと言うか。

「……ったく。わざわざ公園まで抜け出さなくてもいいだろうが」

「いいじゃないですかあ。どうせ近いんですし」

確かに病院から公園まで、歩いて十分もかからない。

しかし、本当にいいのだろうか？

……止めた。考えるのはよそう。いくら考えたって、こうして抜け出してしまうてるのだし。それよりも楽しんだ方が得策だろう。

「ん、またそれを捕まえてたのかよ、可奈」

視線を横にずらすと、可奈の手にはとんぼが一匹、ぱたぱたと羽ばたいていた。反対側の手には他にも何匹か——って、もはや何匹ってレベルじゃないな。小さな手で十何匹ものとんぼを押さえているのは、男の目から見ても少しグロイ。

そんなことはお構いなしにと、可奈は満足そうな顔でもう一匹。

「これが私の特技なんですよー。とんぼが好きなものでして」

言っている間に、もう一匹。流石に持ちきれなくなったのか、可奈は手を広げて一斉にそれを空へと放つ。それはまるで、紅に染まった枝葉が繚乱と舞うかのように鮮やかだった。おそらく力加減をしていたのだろう、飛び立てないものは一匹もいなかった。

「とんぼが好き？」

俺が鸚鵡返しに聞くと、はい、と可奈は頷いた。

「昔、お父さんが私をこの公園に連れて来てくれたんです」

可奈が一旦言葉を切った。

胡乱気な眼差しで、どこかを見つめている。

俺は戸惑いながらも続きを促した。

「何だよ？」

すると、可奈は男っぽい声で応えた。

「可奈、ほら、とんぼが見えるだろう？ どっちが多く捕まえるか、お父さんと競争しよう。え？ 勝ったらお菓子が欲しいだって？ いいぞ。よし、スタートだ」

照れくさそうに笑いながら、競争だ、と繰り返した。
そして可奈は、懐かしそうに言った。

「最初は簡単だなんて思ったんです。でも、どうやっても逃げられてしまう。必死で、どんなに頑張っても手が届かない。で、その時思ったんですよ。私は一生、とんぼを捕まえる事ができないんだって。何だか悲しくなって、泣き出してしまったんです」
バカみたいですよね、と言葉を紡ぐ。

「結局、一匹も捕まえないままお父さんの所へ行くと、何か人差し指を上に向けて、ぼーっと立っているんですよ。お父さんどうしたのって聞くと、にっこり笑って言うんです。ほら、見てなさい。お父さんの指は魔法の指だから、って」
どこか、物悲しそうに見えるのは俺の見まちがいなのだろうか。
「私、本当にすごいって思いました。まるで吸い付くように一匹、とんぼがお父さんの指に止まったんです。……魔法でも何でもなかったんですけれどね」

子供でしたから、と照れくさそうに可奈は付け足す。
なんだかひどく――胸が苦しくなった。

「そっか。じゃあ、もう一回そのお父さんと競争してみたらどうだよ？」

「え？」

「だって、可奈も捕まえるの相当うまいだろ。果たしてどっちが多く捕まえられるのか、俺としては興味があるわけ」

「……無理ですよ。私じゃあもう、勝てません」

すう、と眼前を、一匹の赤とんぼが過ぎる。どこまでもどこまでも、紅蓮に染まる空へと昇って行く。たった一匹で行くのだろうか。寂しくはないのだろうか。

「やってみなきゃ分かんないだろ。絶対いい勝負すると思うけど」

「そう、ですか？」

「保障するって。病気が治ってからやったら、絶対に勝てる」

「――」

可奈が息を呑んだような気がした。俺が訝しげに表情を窺うと、そんな様子は微塵もなかった。ただ華やぐような笑みを浮かべている。

「……そうですね。じゃあ、早く治すためにもそろそろ戻りましょうか」

よいしょ、と、可愛らしい声を出して可奈が立ち上がる。同時に、その腰まである艶やかな髪が花弁のように広がった。

「そうだな」

ポケットから携帯電話を取り出し、時刻を見る。午後四時二十分。ああ、ちよつと長居しすぎたかもな。まあ今から病院へ戻れば何の問題もないだろう。

俺は立ち上がり、ふと空を仰ぎ見る。

蒼穹と真紅が混同する全天。まるで泳ぐように空を飛ぶ赤とんぼ。その光景を一瞬だけ見つめた後、先に歩いていった可奈を追いかけた。

願わくば、可奈の病気が早く治りますようにと祈りながら――。

4. 残された時間と。

そうして一ヶ月が過ぎた。

相変わらず病院の食事は質素だったし、夜更かしも禁止だった。けれど、なぜかいつも俺の傍には可奈がいた。おかしな話だ。俺と可奈は赤の他人だってのに。

でも、いつからかそれが当たり前になっていた。

別段それを不思議に思ったことはなかった。可奈だって同じだろう。ただそれが当たり前になった、たったそれだけの事なんだろう。いつまでもこんな日々が続けばいいと思っていた。

毎日が幸せだった。

でも——そんな日々が続くはずが無かったのだ。

最初から。

Φ

カレンダーを見ると、もう十月はとくに過ぎ去っており、段々と年の瀬が近づいてきていることが実感できる。十一月。まだ初めの週とは言え、秋の気配はその身を潜め始めていた。

「はあ……暇だな——」

呟く。視界に映るのは、相変わらずただ白いだけの病室の天井。

それと壁、ドア。テレビでも見ていればいいのだが、生憎俺には、千円もするテレビカードを買うほどの余裕はない。――別に貧乏って訳じゃないぞ。ただ小遣いがちよっと減らされているだけなのである。

いつもならいるはずの可奈も、夜までいない。別のもっと大きい病院へ、検査の為に çık かけていったのだ。えへへ明日は検査なのですよー、と可奈はなぜか誇らしげに言っていたっけ。全く、相変わらずよく分からない奴だ。

「……」

――分からない、けれど。

いつの間にか、そんな可奈と一緒にいることを無性に楽しく感じている俺がいた。何だろう、ただ楽しいとは少し違う、嬉しいに近い楽しさがある。俺にだって女友達はいるさ。しかしそれとも違う気がする。考えれば考えるほど、底なしの泥沼に嵌ってしまう。

「……はあ」

本当に――よく分からない。

でも、きつとそれでいいのだ。

無理に理解する必要はない。今が楽しい、ただそれだけが佐藤洋介の全てなのだから。

コンコン。

唐突に響くノックの音。そういえば、すでに回診の時間帯になっている。あまりにも暇すぎて時間に気が回らなかったみたいだ。

俺は身体を起こしながら、はいと答えた。

「佐藤さん、失礼しますね」

そんな声が、ドアの向こう側から聞こえてきた。何か変な感じだ。佐藤さん、って苗字で呼ばれることだけは、何度やっても慣れる事がない。

俺の病室に入ってきた看護婦さんは、今まで見たことがない人だった。もしかして新しく来た人なのだろうか。年齢は三十歳を少し過ぎた辺り。可奈より高いが、俺よりも低い上背。顔つきは別段普通で、これといって特徴もなければ欠点もない。一般的に看護婦と聞いて、思い浮かべるイメージそのままの人だった。

「はい、じゃあ体温測ってくださいね」
てきぱきと、慣れた様子で俺に指導してくる。毎日の日課となったこの行為を、俺はただ黙って行う。

「……」

脇の下に体温計を挟むと、必然的に動きが制限される。ふと、何気なく看護婦さんを見ると、どうやら部屋の片づけをしてくれているようだ。俺はそのまま黙って天井を見上げながら時間が過ぎるのを待つ。

——ほんの少しだけ、可奈の顔が頭に浮かんた。
もう検査は終わったのだろうか。ぼんやりと考える。終わったと

したら、何をしているんだろう。大きい病院に行くと言っていたが、それはどこだろう。検査って何？　どんな病状なんだよ？

なあ、可奈――。

ぼんやりと考えていはずが、今では疑問が止めどなく沸いてくる。止めようとするこゝとさえ無駄、止めることをやめてしまう。

そして気づく。

俺は、可奈の事を何も知らないという事に――。

改めて考えてみればそうなのだ。年齢も、病状も、病室の番号さえ分からない。考えつく限り殆ど全てのことを俺は知らないのだ。話をするときでさえ、可奈は自ら俺の病室へやってくる。自分の病室に戻るときも、じゃあねと言って、まるで蜉蝣のように消えていく。

別にそんな事を知らなくても、俺には全く関係ない。俺と可奈は赤の他人なのだ。たまたま入院している病院が一緒で、気が合う友達。それ以上の関係の存在は皆無だ。

なのに、なぜ。

こんなにも可奈の事を知りたいと思ってしまうのだろうか――？

と、

「……佐藤さんって、坂下さんと仲いいですよね」

そんな声と共に、看護婦さんが俺の顔を覗き込んできた。どうやら部屋の整頓が終わったようだ。しかし坂下さんとは誰の事なのか、俺には皆目検討がつかない。あれほどにも迷走していた思考が止ま

る。

「あの、坂下さんって、誰っすか？」

「んー？ ほら、坂下可奈ちゃん。佐藤さんの病室によく来てるって聞いたものだから」

もしかして違かった？ と、看護婦さんは困った笑みを浮かべた。そうか、坂下って言うのか。

「あ、そうです。最近仲いいですけど……どうしました？」

「やっぱり。私ね、坂下さんの担当もしてるんだけど、佐藤さんの話をよく聞くのよ」

うふふ、と、何だかニヤけた笑いを浮かべている。

むう、俺の顔もニヤけているかもしれない。

まあ、全然悪い気はしないから、いいんだけれどさ。

「そうっすか」

一分くらいその状態が続いた後、何だか空気が変わっている事に気がついた。あれ、なんだこの空気は。まるで空気中に鉛を混ぜたかのように。重い。息をするのがなぜか苦しい。看護婦さんの顔はニヤけているのに、あれが作り笑いだと直感する。

「だからね」

ニヤけた笑いを急に消し、真剣な顔で看護婦さんは言葉を紡ごうとする。

やめてくれ。何だか嫌な予感がする。

続くと思っていた足元の道が、目の前で崩れ去っていくような予

感。

聞きたくないのに。

俺は、ついで言葉を止めることができなかった。

「時間がもうないから、思い出を作ってあげてね——」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0618c/>

秋、夕暮れの向こう側

2010年10月9日03時41分発行